打楽器コース
パーカッションコンサート

Program

日時 2021/12/1
17:30 OPEN
18:00 START
場所 洗足学園前田ホール

ご挨拶

本日は「パーカッションコンサートP」にご来場いただき誠にありがとうございます。

今年も無事に演奏会を開催させて頂けたこと、関係各位に深く感謝申し上げます。

1963年、東京文化会館小ホールにおいて日本で初めて打楽器アンサンブルの演奏会が行われました。岡田知之、有賀誠門両氏により結成された「東京パーカッションアンサンブル」、当時は楽器も楽譜も少なく大変苦労されたとのことです。

そこから現在まで、作曲家への委嘱により多くの作品が生まれ、海外からの新しいレパートリーの収集など、打楽器アンサンブル楽曲は飛躍的向上を果たしました。

本日は、打楽器アンサンブルの過去、現在、そして今後を盛り込んだ多彩なプログラムを構成しました。作品の特徴を生かし如何に音楽的に表現するか、学生たちのエネルギーと可能性にご注目いただき、最後までゆっくりと打楽器の響きをお楽しみいただけたら幸いです。

打楽器アンサンブル　企画運営責任者　**石井喜久子**

西川浩平 Guest

Guest Profile

第１回オーストラリア国際フルートコンクール
第３位入賞。
大阪フィルハーモニー交響楽団フルート奏者として活動後、日本の横笛にて現代曲アンサンブルに所属し多くの現代作品に携わる。
CDアルバム「Flutist from the East」Vol.1～4、著書として「邦楽おもしろ雑学事典」「歌舞伎音楽を知る」「和楽器の世界」等を出版。
平成25年度より文科省・科学研究費、27年米国ACC助成を受け、マレーシア、台湾、ミャンマーなどの少数民族の音楽研究に赴いている。

1.赤の大地/クリストファー・ハーディ

森 奈那子(学4) 前田 歩都(学3) 鏑木 舜裕(学1) 田中 遥己(学1) 吉田 創(学1)

クリストファー・ハーディ(Christopher Hardy)はアメリカ出身で、ハンドドラムのスペシャリストとして日本を拠点に幅広く活躍する打楽器奏者。
この曲は2004年1月に作曲された。冒頭は全員のユニゾンで爆発的な印象で幕を開け、やがて静まり広大な地平線を表現する。その後地面から何かが湧き上がるようなpoco a poco cresc.の後、各ソロが互いに燃え上がるように刺激し合う。場面が移り変わった後も終始16分音符が絶え間なく続いており、そのパルスと指定テンポ(四分音符＝168)により一貫して純粋な速さや強烈なドラミングが保たれている。
曲全体を通してppppからfffまで強弱が一段階ずつ非常に細かく指定されており、演奏者の表現力や基礎的な技術が試される。また、楽譜上は6/4拍子だが途中4/2拍子のノリが求められる。
シンプルな編成ながらも、太鼓の魅力を存分に活かし、大地の力強さを熱く表現する。

4年　森 奈那子

2.Megas/Claus-Dieter Zimmer

松井 菜々子(学4) 櫻井 秀悠(学3) 佐藤 綾香(学3) 川﨑 友仁(学2)

『Megas』この曲は速いテンポで揺るがない16分音符からなる前半と、それと対照的に緩やかなテンポで個々の歌うフレーズが絡み合う中間部を経て、ダ・カーポして前半に戻り終わりを迎える構成になっている。
一般的にマリンバは毛糸や綿が巻かれたマレットで奏でるが、今回はマリンバを発展させた中米の楽器メキシカン・マリンバを思わせる『ゴムマレット』を使用して演奏する。
シンプルなマレットだからこそ、マリンバの乾いた音が楽しめる反面、叩いた瞬間の音がより一層際立つので誰一人としてずれてはいけない。
打楽器の原点とも言える『叩いて音を出す』そこから多彩な音が要求される為、各奏者の腕の見せ所だ。

4年　松井 菜々子

3.CROSS for David to Penalosa/Eugene D.Novotney

～１年生による～
相川 拓音　浅井 惇　石井 梨菜　内田 光太郎　大島 一輝　岡崎 颯太
鏑木 舜裕　古仲 咲希　千保木 楽斗　竹内 夏美　田中 遥己
田村 夢佑亜　土居 祥大　中村 侑人 林 まど子　廣瀬 歌菜　松田 陽大
松田 有平　宮下 真凛　三好 花梨　吉田 創　渡辺 歩紀

皆さんは、"日常音"というものに耳を傾けたことはありますか。
私たちは今回、限りなくある日常音の中から"雨の日"をテーマに
「Cross」という楽曲を作り上げました。
ぽつぽつと雨が降り出し、傘を差す人がだんだんと増え、レインコートを着た子供達がそんな雨の中、遊びだす。
雨はどんどん激しくなり、そんな雨もだんだんとおさまり、そして雨はやみ、空を見上げれば虹がかかっていた..。
そんな1日の中にはたくさんの音が潜んでいます。
誰もが経験したことのある、"雨の日の1日"。情景を思い浮かべながらご覧いただけたら嬉しいです。
どうぞ最後までお楽しみください。

1年　竹内夏美

4.《シャコンヌ》～14人の打楽器奏者のための

作曲：ヨハン・セバスティアン・バッハ
（編曲：フェルッチョ・ブゾーニ）
編曲：野本 洋介

北野 佑芽(学4)　近藤 花音(学4)　髙橋 芽生(学4)　松井 菜々子(学4)　岡澤 七海(学3)
近藤 寛斗(学3)　櫻井 秀悠(学3)　大野 紗楽(学2)　小川 友李江(学2)　川崎 友仁(学2)
小山 梓(学2)　佐山 果凛(学2)　廣木 太陽(学2)　渡辺 優生(学2)

「音楽の父」と称されるヨハン・セバスティアン・バッハ[1685-1750]について、今ここで詳しく述べる必要はないでしょう。
独奏ヴァイオリンの楽曲として特に有名なこの「シャコンヌ」は「無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第２番ニ短調BWV1004」の終曲（1720年作）です。

「シャコンヌ」とは三拍子による舞曲の一種であり、この作品でみられるような変奏曲の形式として用いられ、バッハは冒頭のバス主題を展開し、また中間部ではニ長調に転じる三部形式を取っています。
その後、この曲はイタリア出身でドイツを中心に世界中で活躍した作曲家・ピアニスト・指揮者であるフェルッチョ・ブゾーニ[1866-1924]によってピアノ独奏に編曲されます。

　ブゾーニはテンポ表記も表現記号も無いヴァイオリン独奏の楽譜に様々なものを記し、さらに和声や新たな旋律を追加しました。
昨今のピリオド（古楽）的なアプローチや原典主義からすれば、過度にロマン主義的との批判もありそうですが、編曲当時である１９世紀末の時代背景を考えれば充分理解出来る範疇かと思います。
またニ長調に転じた冒頭のquasi Tromboni『トロンボーンのように』という指示などを見るに、ただピアノの技巧に走っているわけではなく、人間のあらゆる感情表現を生み出すバッハの音楽性や精神性を踏襲しているように感じます。

今回、このピアノ譜を元にさらに打楽器アンサンブルへと編曲しました。
打楽器アンサンブルは編成を際限なく組み合わせることが可能な形態のため、編曲するにあたって以下の点を考慮しました。

・演奏人数をバッハの数字と言われる「14」人とする。
（「BACH」をアルファベット順に数えると2,1,3,8番目の文字であり、その数を足すと14となる。バッハはこの数字を意識して作品を書いていたとされる）

・使用する鍵盤以外の打楽器類は19世紀末の管弦楽作品で一般的に使われていたものとする。

　バッハ作品を編曲するというのは大変畏れ多いことですが、古典派からロマン派の音楽史の流れを感じつつ、現代の打楽器アンサンブルならではの魅力を感じて頂けましたら幸いです。

（指導教員 野本 洋介）

5.鳥ポリリズム(鳥リズムII)/吉松隆

北野 佑芽(学4) 天谷 芽生(学3) 大塚 愛美(学3) 岡澤 七海(学3)
北山 絢萌(学3) 近藤 寛斗(学3) 前田 歩都(学3) 大野 紗楽(学2)
小川 友李江(学2) 小山 梓(学2) 廣木 太陽(学2) 田村 夢佑亜(学1)

この曲は1991年秋、山口多嘉子パーカッションランドの委嘱で作曲された鳥リズム1番に続き、2008年秋、洗足学園打楽器アンサンブルの委嘱で作曲された鳥リズム2番である。作曲者である吉松隆は「鳥」をテーマとした作品を多く残しており、この曲はそのうちの一つと言える。

曲名にある「ポリリズム」とは複数のリズムが同時に演奏される事である。ステージ中央のmarimba、vibraphone、xylophoneを囲んで、打楽器群(民族楽器など自由に指示をされた楽器)がポリリズムによる色彩の世界を紡いでゆく。編成は9人以上と明確には指定されておらず、楽器もwoodenやmetalといった明確でない表記の所が多々あり、奏者の即興が可能な自由度の高い作品である。

4年　北野 佑芽

6.DISARCHITECTURE/Dave Hall

北野 佑芽(学4) 髙橋 芽生(学4) 川﨑 友仁(学2) 小山 梓(学2)
※授業内で実施したオーディション希望合格者による

フランク・ゲーリーの「脱構築主義」建築。これは設計過程における非線的な手法が使われ、破片のような建築物の形状や、建築の要素に歪みや混乱を起こすような建築様式のことである。
ビルバオ・グッゲンハイム美術館やウォルト・ディズニー・コンサートホールなどがこれにあたる。

この「脱構築主義」による美術館の数学的優雅さを表出した建築の見事さをオマージュとして描き出した曲が、「ディスアーキテクチャー」である。
（作者による曲目解説より引用）
一つの楽器や一つの手法に縛られず、また次々と変化する拍子とともに絡み合うリズムで「脱構築主義」を表現する　　4年　髙橋 芽生

7.笛と邦楽打楽器、西洋打楽器のための楽市七座/和田薫

森 奈那子(学4) 天谷 芽生(学3) 大塚 愛美(学3)
北山 絢萌(学3) 佐藤 綾香(学3) 渡邉 拓斗(学2)

和田薫(1962-)はオーケストラ作品や現代音楽、アニメや映画音楽など幅広く活躍する日本の作曲家。邦楽器を使用し「和」のテイストを取り入れた作品を多く手掛けており、『楽市七座』はその一作目にあたる。

曲名の基となっていると考えられる「楽市・楽座」とは、戦国時代、織田信長が始めた経済政策。それまで商人たちが市場で売買をするためには、納税の義務や規則が定められていたり、「座」という同業者組合の特権が行使されていたりしたが、それらを撤廃し誰でも自由に売買ができるようになった。
この制度により商業の発展をはじめとした様々な影響があり、町は賑わい信長の天下統一にも大きく貢献した。

この曲は1988年ミシガン大学音楽協会の委嘱により、マイケル・ウド―主宰ミシガンパーカッションアンサンブルと日本音楽集団のために作曲され、同年に初演されている。「邦楽器、つまり日本の表現方法において西洋との共鳴・融合を試みました。」と作曲者本人は述べている。

5つの場面により構成されており、冒頭からは篠笛の特殊奏法を用いたソロに打楽器が合いの手のように色付けをし、聴衆を厳かな「和」の世界へと誘う。場面が次々と移り変わるにつれ、楽しげな曲調からソロ回しなどを通して徐々に個々が主張をし合う。その様子はまるで「楽市・楽座」によって人々が手に入れた自由を謳歌しているかのようである。

4年　森 奈那子

企画運営責任者
石井 喜久子

指導教員
石井 喜久子　井手上 達　野本 洋介　古川 玄一郎　村瀬 秀美

照明　岡田 勇輔
合奏授業助手　北川 乃梨子
アカデミックコーディネーター　鈴木 和徳